

現代は、インターネットで知りたい情報を手軽に調べたり、海外に自由に行き来したりすることもできますが、江戸時代は、200年以上続いた鎖国のため国が閉ざされ、日本人が海外へ行くことはもちろん、許可された外国の船以外は日本に来ることも禁止されていました。

しかし、1853(嘉永6)年、アメリカのペリーが来航したのをきっかけに、日本は鎖国をやめて開国しました。幕府は、海外の文明を知るために、アメリカやヨーロッパなどに使節団を派遣し始めます。幕末から明治にかけて、多くの日本人が海を渡るようになり、その中には佐賀の人たちもたくさんいました。

もともと佐賀藩は、鎖国時代、唯一西洋に開かれた長崎港の警備を務めていたことから、西洋の技術や文化に強い関心を持っていました。蘭学の研究に積極的に取り組み、その中心的な存在だったのが佐賀藩主鍋島直正なべしまなおまさです。長崎警備を通して、海外の事情をよく知っていた直正は、外国を身近なものに感じ、西洋の技術や文化を取り入れながら優秀な人材を育てていきました。そのため、誰もが自由に海外に渡れない時代に、佐賀藩は他藩より多くの人々を派遣することができたのです。



■黒船来航図巻



(佐賀県立佐賀城本丸歴史館 蔵)

□アメリカ文化に触れた遣米使節団

開国した日本は、1858(安政5)年、アメリカと日本との貿易に関する取り決めとして「日米修好通商条約」に調印します。その批准書(条約を国家元首が承認する最終の確認書)の交換のため、1860(万延元)年、幕府は遣米使節団を派遣しました。使節団員は77名で、そのうち佐賀藩からは川崎道民かわさきどうみん、小出千之助こいでせんのおすけ、島内栄之助しまうちえいのすけなど7名が参加しました。

当時の日本人にとって、アメリカへの航海は貴重な体験だったため、多くの使節団員が記録を残しています。小出千之助は、「世界の通用語が英語である」と報告し、佐賀藩は従来の蘭学研究から英学研究へと転換を図ります。英語を学ぶための塾(のちの致遠館)を設立し、千之助も佐賀藩の後輩たちの英語の指導にあたりました。

川崎道民は、訪問した先々で自分たちの行動がすぐに新聞記事となって報道されることに驚き、新聞の果たす役割の重要性を実感します。日本にも活字印刷の新聞が必要だと考え、1872(明治5)年に佐賀県初の日刊新聞「佐賀県新聞」を発行しました。

アメリカ滞在中の使節団は、各訪問地でセレモニーやパーティーが催されるなど大歓迎を受け、一般のアメリカ国民とも触れ合いました。日本人の服装や日本刀、髷の姿に関心が高まるなか、一部の人々からは見た目の違いから差別的な言葉や振る舞いも受けました。しかし、幕末の佐賀の人たちは、どんな時も上品で丁寧な振る舞いで接し、新しい技術や文化を、佐賀のため、日本のために生かしていきました。



■致遠館跡(長崎県長崎市五島町)

(川副義敦氏 提供)

□外国の文化や技術を知るためパリ万博へ

19世紀から、欧米では、世界各国の代表的な製品や技術、主要な産物を集めて披露する万国博覧会が開かれていました。日本の初参加は、1867（慶応3）年、フランスで開催されたパリ万国博覧会です。実は、幕府よりも先に、薩摩藩が単独での参加を決めていて、幕府が各藩にも参加を呼び掛けたところ、佐賀藩だけがそれに応じました。他藩は、鎖国以来、海外に不慣れだったことが不参加の原因と考えられます。これに対し佐賀藩は、長崎を通して海外の情報や知識を得ていて、藩士たちの渡航経験もあったことから、参加することに迷いはありませんでした。

佐賀藩からパリ万博に派遣されたのは5人で、当時、軍事改革の指導的な役割を担っていた佐野常民、貿易担当で商人の野中元右衛門、通訳として小出千之助もいました。現地では、グラバーの手助けによりイギリスに密航し、留学中だった石丸虎五郎や馬渡八郎も合流しています。また、幕府から将軍の名代として参加した徳川昭武一行の中には、補佐として後に加わった唐津藩の尾崎和一郎（俊蔵）もいました。

パリ万博でのエピソードとして、あたかも独立した国のように出展した薩摩藩と、それに反発した幕府とが対立したことが知られています。結果的に、幕府は「大日本国大君政府」、薩摩藩は「薩摩大守政府」、佐賀藩は「肥前大守政府」とし、まるで日本には3つの独立した国があるような出展になりました。

ちなみに、佐賀藩からは磁器や和紙、茶などが出品され、会場の人たちに佐賀の特産品をアピールしました。西洋の人たちにとっ



（佐野常民記念館 提供「佛國行路記」所収）

■1867年、佐賀藩の代表としてパリ万博に出席する一団。

（後列左より）藤山文一、深川長右衛門
（前列左より）小出千之助、佐野常民、野中元右衛門

ては珍しい品物ばかりだったので、とても好評だったようですが、使い方が分からず、徳利をランプ台として使ったり、大きな昆布を壁に飾ったりしたそうです。

にぎわいをみせたパリ万博でしたが、野中元右衛門はその様子を見ることなく、急病に見舞われてパリに着いた日に亡くなってしまいます。実は日本を離れる前から体調が悪く、周囲からの反対もありましたが、「フランスは“仏の国”と書くので、そこで死ぬなら本望」と言っていたそうです。たとえ健康体であっても、当時の人々にとって、船での海外渡航は決して安全とは言えず、命がけでした。彼らが海外で得た知識・技術は、新しい時代を担う基盤となりました。

□グローバルな視点で世界から日本を見るところ

時代は、江戸から明治へと変わり、1871（明治4）年、右大臣である岩倉具視を特命全権大使とする、岩倉使節団を米欧諸国に派遣することになりました。これは、近代的な国づくりを目指して、各国の優れた制度や文化、産業や教育などを学ぶことが目的でした。

岩倉を補佐する副使として参加したのが、木戸孝允、伊藤博文、大久保利通、そして武雄出身の山口尚芳でした。その他、佐賀県からは使節団員として久米邦武、留学生として鍋島直大とそれに随行した百武兼行、山口俊太郎（山口尚芳の長男）、相良猪吉（大隈重信の甥）など、総勢107名での船出となりました。行き先はアメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデン、イタリア、オーストリア、スイスの12カ国で、大隈重信や佐野常民らが中心となって準備を進めて参加した、ウィーン万博も見学しました。



■岩倉大使一行写真
（左より）木戸孝允、山口尚芳、岩倉具視、伊藤博文、大久保利通
（武雄市図書館・歴史資料館 提供）

留学生の中には少年もいて、山口俊太郎も当時満8歳でしたが、「神童」と呼ばれるほど優秀で、そのままイギリスに留学しました。9年後に帰国しますが、イギリス人のように英語を話せたそうです。

久米邦武は、訪問した先々で記録したメモや、各国で買い求めた書物をもとに『米欧回覧実記』を書き上げました。300以上の挿絵が掲載されているため、とても分かりやすく、当時の日本人に大きな衝撃を与えました。

150年以上も前から、すでに世界を見ていた佐賀県の人たち。苦難を乗り越え、世界から日本を眺める視点を培った彼らは、その後、さまざまな分野で活躍していきました。



■久米邦武 (久米美術館 提供)



(久米美術館 蔵)



(川副義敦氏 蔵)

■『米欧回覧実記』

■『米欧回覧実記』で使用された挿絵

□幕末から明治の初めにかけて、使節団に加わって世界を見聞した佐賀県の人たち

- 1860(万延元年)年
遣米使節団としてアメリカへ
綾部新五郎、川崎道民、小出千之助、島内栄之助、福谷啓吉、本島喜八郎、秀島藤之助(以上、佐賀藩)
- 1862(文久2)年
遣欧使節団としてヨーロッパへ
川崎道民、石黒寛次、岡鹿之助(以上、佐賀藩)
幕府の貿易調査のため上海へ
納富介次郎、深川長右衛門、山崎卯兵衛、中牟田倉之助(以上、佐賀藩)
- 1865(慶応元年)年
グラバーの手助けでイギリスに密航留学
石丸虎五郎、馬渡八郎(以上、佐賀藩)
- 1867(慶応3)年
パリ万国博覧会に参加
佐野常民、野中元右衛門、深川長右衛門、小出千之助、藤山文一(以上、佐賀藩)
尾崎和一郎(唐津藩)
- 1871(明治4)年
岩倉具視の遣米欧使節団としてアメリカ、ヨーロッパへ
山口尚芳、池田政懋、中山信彬、久米邦武、中島永元、中野健明、山口俊太郎、相良猪吉(以上、旧佐賀藩)



(佐賀県教育委員会「佐賀県教育史」より)

■石丸虎五郎(右)と中牟田倉之助(左)



(佐賀県立佐賀城本丸歴史館 蔵)

■パリ万国博覧会の会場全体図



『明治天皇御紀附録本1「岩倉大使欧米派遣横浜港」』(宮内庁 宮内公文書館 蔵)

■「岩倉大使欧米派遣横浜港」

この他にも、旧佐賀藩の鍋島直大や百武兼行、旧小城藩主の鍋島直虎、多くの袋久平など、ヨーロッパに留学した多くの佐賀県の人たちがいました。

考えてみよう!

海を渡った佐賀県の人たちのように、あなたがチャレンジしてみたいことはありますか?

より高い目標を設定し、それを達成するためには、何が必要なんだろう。

(参考文献)

- 『佐賀藩』川副義敦 著
- 『特別展近代との遭遇～世界を見る・日本を創る』佐賀県立佐賀城本丸歴史館